

---

# 赤の原作破壊者、青の傍観者もどき

迷猫ちーず & 菜歌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤の原作破壊者、青の傍観者もどき

### 【Nコード】

N5250BA

### 【作者名】

迷猫ちーず&葉歌

### 【あらすじ】

ある所に、二人の少女が居た。

彼女達は、当然のような、ごく普通の生活を楽しんでいた。

今日も二人で、楽しく平凡な毎日を享受していた。

…はずだったのだが。

突然現れた自称「神様」に、別の世界にトリップさせられてしまった！

これは、そんな二人のお話です。

所謂トリップ夢小説というものです。

迷猫ちーずと萊歌の二人で書いていきます。

…とっても気紛れ残念更新です。

視点をページごとに切り替えつつ書いていきます

赤 智香視点 青 夕里視点 で進めていきます。

智香視点を迷猫ちーずが書き、夕里視点を萊歌が書いていきますよ。

ちなみに、夕里視点の話以外の粗筋とかは全部迷猫ちーずが書いてます。

## 人物設定

オリキャラ設定

（随時追加：なんか増えすぎて困ってる。）

雨宮 智香（あまみや ちか）

元気な天然系？軽く電波な女の子。基本的にはいい子。

口調は大体の場合

「～だね！」「～だよ！」とか、明るくて幼い感じ。

トリップ先での容姿は、茜色の髪、瞳に、猫口。

愛され体質。でもって愛し体質（？）

優しい人は大体好きだし、面白い人はもつと好き。

普段はさして強いわけではないが、キレた時の力は最強。そうなる  
と凄く怖い

でも、とてつもない鈍感な上、自分が何されても（ちよっかいかけ  
られようが、殺されかけようが）全く怒らない。

なので、怒らせたい場合は、彼女の友人（特に夕里）を狙う必要がある。

しかしそこまでして怒らせてもしょうがない。

夕里のことをゆるーちゃんと呼ぶ。原作知識は大体ない。

神様の相手をするのは楽しいし、面白いから好き。でも、夕里が怒  
るなら、一緒に怒る。

百合じゃないよ！お友達だよ Friend だよ。

実はいわゆる天才児。ただし理系に限る。

国語や英語は苦手。ただ暗記は得意なので、一応できる。ただ、め  
ちゃくちゃ模範解答になる。答え見たんじゃないかってくらい。

得意教科、数学、理科、社会、技術、音楽、家庭科

苦手教科、国語、英語、保健

てんどっ  
天堂 夕里 ゆうり

業歌が書く方の主人公

無表情でクールなかつこいいミステリアス少女。

・・・と見せかけて内心喋りまくり、慌てまくりのパニック少女。  
口調は「〜だ」とか、男っぽい。

心の声が煩い。

トリップ先での容姿は長身に、オリエンタルブルーの髪と青い瞳。  
無表情なので、内面を知らない人にとっても怖がられる。

が、知っている人にはとても微笑ましく見える。

英語・国語は凄いできる。100点も取れる。

でも他が出来ないのが恥ずかしいので、わざと白紙で出して

「自分はどんな教科もやる気が無い」を演出中。

普段からとても強い。そして結構怒りっぽい。

でも、智香のキレたとき程は強くない。智香がキレたら速攻逃げようとする。

智香のことは普通に智香と呼ぶ。原作知識あり。

神様に対して非常に非情。淡泊過ぎる！

得意教科 英語、国語、家庭科、体育

苦手教科 数学、理科、社会、音楽（やる気ナシ）

ちなみに、二人とも一人暮らしだったり。

で、二人とも家ごとトリップしてます。

自分で料理してたり繕ったりするから家庭科は得意な方に入ってます。

しかし、縫い物するゆうちゃんが想像出来ん……！

神様

残念なイケメン。アホ。

神と魔族のハーフで銀髪に赤い瞳。やべえ中二くせえwwwなんだ  
こいつwww

こう見えてなかなか偉いやつなので、好きなようにやっている。

ヘタレ野郎。しかも痛いコ。

しかし、実は凄く強い。

頭が使えないじゃなくて頭を使わない。だから阿呆。馬鹿ではない。名前が不明。智香からはおにーさんだったり、かみさまだったり。

ゆーちゃんは、コイツとかお前としか呼んであげない。冷たい！

でも、まあ、無関心よりはマシだと思いたい。

多分一番扱いがひどいキャラ。なかなか空気。

でも大体こいつのせいなので、自業自得。仕方ないね！

赤 0話前半 さて、トリップするらしいが（前書き）

智香視点です。

## 赤 0話前半 さて、トリップするらしいが

うつちゃんは、雨宮智香。どこにでもいる普通の女の子なんだよ。

今はね、なんと、私の友達のゆうちゃんこと天堂夕里ちゃんの家に来てるのです！

ゆうちゃん、結構こういう事に淡泊だから、ゆうちゃんの部屋に居れるなんて、すごいうれしいんだ！

「ゆうちゃんゆうちゃん、遊ぼうよ。」  
ぎゅと、ゆうちゃんの手を引っ張ってみる。

「ちょっと待て智香。少しは落ち着け。」  
クールに、ぶっきらぼうに彼女は言う。

「智香、ちょっと待っててくれ。」

「ん、分かった！」

そう言ってうつちゃんはさっと手を放す。

するとゆうちゃんは慣れた手つきでさっと髪を縛って黒いキャップを後ろ向きに被った。

黒いＴシャツに、何の加工も無いジーンズ。

ゆうちゃんはいっつもこんな格好。

とか思ううつちゃんにしても、普通の青いＴシャツにデニムのミニ



スカート。

っていうすごいラフなファッションで、髪も全く縛ってないから、むしろゆーちゃんより駄目かもね。

なーんてどうでもいいことを考えてみちゃったり。

てか比べて何になるんだよ！みたいな。

うつちゃんは考えることが脱線しがちなぁー。仕方ないね！

「よし行くか。で、どこに行くんだ？」

髪を縛り終えたゆーちゃんは全く表情を変えずにこっちを見て尋ねる。

「んー？勿論ノープランだよー。特に行く場所なんて考えてないから、ゆーちゃんが決めてよね！」

ゆーちゃんは、「やっぱりか…」って若干呆れた顔で向こうを見た。

ゆーちゃんの表情の変化なんて、きつとうつちゃん位にしか分かんないんだろうなぁー。

えへ、ちよつと優越感だね。

「まあ、まずは散歩でもしようか。」

とっても無難な答えが返ってくる。でも、うつちゃんは何も考えてないから、そっちよりはマシかなーなんて。

「うん！了解しましたー！」

そう言ってうつちゃんは部屋のドアを蹴飛ばすくらいの勢いで外に

走り出した。

- - -  
- - -  
- - -

と、出かけたのはいいんだけど…。

「あれ？ ゆーちゃんどこ行っただのかなー？」

もしかしてこの歳でゆーちゃん迷子！？ あ、もしかして迷子なのうつちゃんの方？

だったらこれはやばい。とつてもやばい。

辺りは真っ暗闇。あれ、今お昼だったはず。はう！もしかしてうつちゃん、ついに時間感覚が狂っちゃった？

それで、迷子になって、適当に歩いているうちに、夜になっちゃったとか？

「んー。それにはお腹すいてないなあ。」

うーん。不思議なこともあるもんだなあー。

あ、でもどうしよう。きつとゆーちゃんやお母さん、心配して探し回ってるんじゃないかな。

そしたら、見つけてもらったとき、きつとすっごい怒られるんだろうなあ。ゆーちゃんが怒ると怖いもん。

なんて言い訳したらいいんだろう…。うう…。

なんて、変なこと考えていると、自分の斜め上辺りから光が降ってきた。

その光を頼りに辺りを見渡してみると…。

「…って、智香？」

少し離れたところにいるのは、大好きな…

「ゆーちゃん！」

うつちゃんは急いで彼女の所に走っていった。

『ゴホン。』

「大丈夫か？智香。」

「うん、うつちゃんは大丈夫だよ！」

どうやらゆーちゃんも迷ってたみたい。うつちゃん1人迷ってた訳じゃなくて良かった！

ゆーちゃんはある見えてこういう暗いところ苦手だから、1人で大丈夫だったのかな？

『おい。』

「ゆーちゃんこそ大丈夫だった？うつちゃん心配だったんだよ！」

『気づけ!』

「ああ、勿論大丈夫だ。」

さつきから、三人目の声が聞こえる。うつちゃん達二人しかいないのに。ああ、ついに耳までおかしくなっちゃったの私!

『すいませーん。』

「というか、ここは一体何処なんだ?見たこともない場所だが…」

そう言つてゆーちゃんは辺りを見回した。私も一緒になつて周りを見してみる…あれ?

「誰!?!」

「…ぐすつ」

そこには、めそめそと泣いている背の高いお兄さんがいた。

え?あ?誰?

えつと、多分表現はお兄さんで間違つてないはず!

黒色の綺麗な髪に、赤い目。絶対日本人じゃないよね。うん。赤目だし!

結構かつこいい顔をしている。これが所謂いけめんって奴なんだね!

けど、やっぱりゆーちゃんには勝てないよね！ゆーちゃんかっこいいし！

それでもって見たことも無いような良く分からない服を着ている。

んー。なんだろう。なんか、本とかに出てきてる神様みたいな？でも、神様だったらこんな風に泣かないよね。

あ、でも、皆違って皆良いつて言うし、そういう神様がいたって良いよね！

んー、それ以前に神様って現実にいるのかなあ。いるとは思っけど、こっやって見るこっつてできるのかな？

「…っ、俺は神界族と魔界族のハーフ。  
世界の管理者。いわゆる神様と呼ばれる存在だ。」

えーっ…これはどういうことなんだろう。  
自分のことを神様っていうなんてびっくりだよ！

っっていうかマジで服装の通りなのかよ！みたいな。

えっ…たしか、ゆーちゃんに言わせれば、  
これは所謂「ちゅーにびょー」って奴なのかな。

んー。よく分からないや。分かりませんごめんなさい。

「ぜってえ信じてないな！俺は本当に神様なんだぞ！」

何だろう。たしか、推理小説とかじゃあ犯人は絶対自分は犯人じゃ

ないって言うよね。

まあ、そこはどうでもいいか。

「じゃあじゃあ！一面花畑にしてみせてよね！」

あー、うん神様なら、命を操ることとかできるんだよね？

だったら、辺りを全部花畑にできたら、周りを生きている植物でいっぱいに出来たら凄いいんじゃないかな。

っていう、ちゃんと理に適ったふかーい考えがあつて、

別に、ただうっちゃんが一面の花畑を見たかったとかじゃないからね！

いえごめんなさい見たかっただけです。

あの神様なおにーさんもうろたえてるし、ゆーちゃんは呆れてるし、

あれ？これ結構まずい空気？

…まあいつか！

それにしてもおにーさん、汗かいてるけど、ここそんな暑いかな？

「え…、花畑？

あー、うん、よし、やってやる。ちょっと待ってる…。」

心なしかおにーさんのテンションが下がってる気がした。

で、数分後―

「出来ませんでした！すみません！」

「やっぱりか！」

すかさずゆーちゃんがツツコミをいれる。

あー。おにーさん、中学生相手にすみませんなんて。別にそんな構わないのに。

って、ゆーちゃん怒鳴ってる？

「あれ、ゆーちゃんが怒鳴るなんて珍しいんじゃない？」

これはホント。ゆーちゃんは感情を表に出さない人だから、初対面の相手に怒鳴ったりするなんて、とっても珍しい。

あー、でもゆーちゃん、怒ってるなあ

「智香、ちょっとこいつ押さえといてくれ。」

ゆーちゃんが感情を表に出してくれるのはうれしいんだけどなあ。

うっちゃん、結構あのおにーさん好きだあ。

まあ、ゆーちゃん怒ってるし、うっちゃんはゆーちゃんの味方だから、

ゆーちゃんが何か言ったら、やっぱりその通りにしなきゃね！

「了解だよー！」

うつちゃんは、それはもう思いつきり元気よく叫びました！

数分経過

「本当にすいませんでした…（泣）」

「泣くな。」

ゆうちゃんは、それこそ何だこのヘタレ、みたいな目でおにーさんを見ている。

っていうか、結局のところ、このおにーさんが本当に神様なのか、証明できてないよね。

だめじゃん。でもちよっとゆうちゃんとの掛け合いは面白かったや。案外仲良し？

「で、でも俺は神様なんだ！…えっと、じゃあ証明するために異世界送ってやんよ！」

…異世界かぁ。いいなあ。

でも、このおにーさん、案外適当っぽいから、変なところ吹っ飛ばされたらどうしよう。

って、それ以前にまず異世界にいけるかどうかすらわかんないし。

あ、というか、本当に行けた所でそういうのって神様だからって勝手にやっていいのかな？



職権乱用？

「智香、どうする？」

「じゃー送つてよ、証明になるからね！」

とりあえず、うっちゃんがいいって許可したら、おにーさんは目をぱあっと輝かせる。

すごいキラキラ輝いた目で見られてもうっちゃん困る…。

で、ゆーちゃんは…うん、やっぱ表情変わんないね。でも、はあ？  
くらいには見てくれる？

とか考えてるうちに、おにーさんが目を閉じて、腕を振ったその瞬間、ぱっと世界が暗転して、急に景色が変わっていった。

赤 0話前半 さて、トリップするらしいが（後書き）

中途半端でページが切れます。

∴長くなっちゃった。

赤 0話後半 さて、トリップしたらしいが（前書き）

智香視点です。

## 赤 0話後半 さて、トリップしたらしいが

見えるのは、パステルカラーの壁。

その壁に囲まれて、私はふわふわのベッドに寝転んでいた。

周りの本棚には、色んな種類（漫画やゲームの攻略本から、哲学書や心理学の本まで）がずらあっと、まあ一応整頓されて並んでいる。

薄い黄緑や、ピンク色のパステルカラーで統一された部屋。

紛れも無くうつちゃんの部屋。

ふわりと、白いカーテンが風に揺れる。

もしかして今の夢だったのかな。なんて思う。

ずいぶんリアルだったなあ。ゆうちゃんの反応とか、お兄さんの仕草とか、まだ鮮明に覚えてる。

ゆめなんて普段はすぐ忘れちゃうのに。

そういえば、今何時だろうと時計を見る。

あ、そういえば、たしかゆうちゃんとずっと遊んでたんだっけ。

でもまだお昼。夕方にすらなっていない。

あれ。ゆうちゃんは何処にいったんだろう。

とりあえず、閉まっているカーテンを開けよう。

窓に近づいて、カーテンを開ける。窓ガラスにうつちゃんの姿が…

あれ？おかしいな。慌てて鏡を持ってきて自分の姿を二度見。

あれ、おかしい。絶対おかしい。

いま鏡に映ってる「うつちゃん」は、絶対今までのうつちゃんじゃない。

どっからどう見ても、何度見返しても、

鏡に映るうつちゃんは、ショートともセミロングともつかない髪は

赤い。夕日みたいに真っ赤な赤。夢で見たおにーさんと似ている色。

でも、暗さがなく赤色。茜色って感じの色だね。

でもこれは…校則違反？じゃなくて、ありえないでしょ！

よく見れば（よく見なくても）目の色まで茜色になっている！

何でこんなことに。

うつちゃんは、髪は中学生だし、校則違反だし、染める気も全然無い。ってかあるわけないよ！

あと、カラーコンタクトは目にモノを入れるなんてしんじらんない！って人だから、持っていない。

というか、それ以前にそんなもの持ってないから、寝ぼけてやったとかそんなのはありえない。いやまず普通寝ぼけてやることなんてありえないでしょ！

だけど、純日本人のうつちゃんが生まれつきこんな髪と目なわけがないじゃんか。

つまり、ここから導き出される答えは…

「夢だけどー、夢じゃなかったー！」

うつちゃんの声は、そこまで広くない部屋に無意味に虚しく反響した…。

そんな自分の変化にビックリしていると、更に物凄い不思議なものが目に付いた。

…隣の家、確かこんな屋根の色じゃなかったと思うんだけど。

この色、凄く見覚えがある。

ゆーちゃんの家の屋根！

つてうつちゃんの家からゆーちゃんの家まで一応1・5kmあるんだって！

何でゆーちゃんの家が隣にあるの！？

…そういえば、ゆーちゃんはどうなったんだろっ。

うつちゃんの見た目がどう見ても日本人じゃないって感じにそれは

もう赤くなってるけど、ゆーちゃんは？

まさかゆーちゃんも赤って事はないよね？

だってゆーちゃんに赤はあんまり似合わないよ。

個人的に寒色の…まあ青がいいかなー？

って変わってたら日常生活で困るでしょ！

変わってないのが一番なんだけど！

…せっかく近くなったことだし、直接会って確かめよう！  
うん。それが一番いいよね！

赤 0話後半 さて、トリップしたらしいが（後書き）

まーた中途半端です。

何処にトリップしたのかわからないのは、

何処に行ったのか考えてなかったからです。てへ。



青 0 話 「誰!」「…ぐすっ」(前書き)

夕里視点です。

菜歌が書いてます。

青 0 話 「誰!?」「…ぐすっ」

うちは天堂夕里。

普通に中学校に通っている一般人だ。

うちの家に遊びに来ているのは友人の雨宮智香。

因みに怒るとものすごく怖い。

「ゆーちゃんゆーちゃん、遊ぼうよ」

「ちょっと待て智香。少しは落ち着け」

智香に腕を引っ張られているんだが…マジで痛いんだ！

内心涙目だが表には全くと言っていいほど出ない。

心情を悟られないという点ではいいが、不便なほうが多い気がする。

「智香、ちょっと待っててくれ」

と一応声をかけるがいつものことだし時間はとらない。

でも親しき仲にも礼儀ありという言葉がある。

うちはこの言葉が好きだ。だから少しのことでも智香にはひとこと言うことにしている。

「ん、分かった!」

と了承を得てすぐに髪を後ろに一本に縛って黒のキャップを後ろ向きにかぶる。

服は黒のＴシャツにジーパン、うちのいつもの服だ。

女らしさが無いのは気にしないでほしい。

うちはそういうのは着たくないからだ。かなり個人的な理由。

でも服なんてそんなもんだろう。

「よし、行くか。で、どこ行くんだ?」

うちに遊ぼうと持ちかけてきたのは智香だが、うちの予想が正しければ…

「んー? 勿論ノ プランだよ。特に行きたい場所なんて考えてないから、ゆ ちゃんが決めてよね!」

やっぱりか…智香らしいが、向こうから誘ってきたのだからそれくらい考えてほしい。

でも、それを言ったとして智香が変わると思えない。

にしても…どこがいいんだろうか。

うちは行きたいところなんてないし、なるべく智香の喜びそうなところがいいんだが…

……。わ、わからん…どうしよう。

し、仕方ない。

「まあ、まずは散歩でもしょうか」

無難すぎるが、本当に思いつかなかったんだ！

それくらいは許してほしい。

「うん！了解しましたー！」

そう笑顔で智香は言って、智香はうちの部屋のドアを蹴飛ばしそうな勢いで出て行った。

……結果オーライ？

- - - - -  
出かけたのは良かったが、そのあとで智香の姿が見えないと思ったら、いつの間にかよくわからないところについていた。

「……どこだ？ここ」

辺りは真っ暗。

智香どころか、何も見えない。

はっきり言って智香もないし、真っ暗な空間に一人きりって、怖い。

何処までも続く、黒、という色の表現は適切では無いように思える、夜の闇よりも深い暗闇。

……ずっといたら気が狂いそうだ。

自分が立っているのかすら分からなくなりそう。

つらつらと考えていると、永遠に続きそうな暗闇に光が差しした。

その光はスポットライトの様に自分とあと一人の人物……

「…って、智香？」

暗闇に慣れていたせいですが、すぐには分からなかったが、その人物は智香だった。

うちは智香の無事を知ってほっと胸を撫で下ろす。

「ゆーちゃん！」

智香もうちに気付いたのか走り寄ってきた。

『ゴホン』

「大丈夫か？智香」

「うん、うっちゃんは大丈夫だよ！」

確かに智香は平気だろう。

お化け屋敷は平気だし、智香はその持前の天然さで向けられている悪意にさえ気付かないような奴だ。

もったも、智香はうちと違って悪意を向けられることはほとんどない。

むしろ善意を向けられて友達になるのが智香だ。

『おい』

「ゆちゃんこそ大丈夫だった？うつちゃん心配だったんだよ！」

『気づけ！』

「ああ、勿論大丈夫だ」

何故か、さっきからうちでも智香でもない声が聞こえる。

うちの聴覚が狂ったのか？幻聴？…まあいいや。

『すいませーん』

「というか、ここは一体何処なんだ？見たこともない場所だが…」

そう言ってうちはあたりを見回してみた。

そしたら……

「誰！？」「

…ぐすつ」

そこにはめそめそと泣いている背が高い男がいた。

だ、誰だっ！？

黒髪に赤の瞳。顔は整っていて服装は見たことのない衣。あえて言うなら神話に出てきそうな…

って、は？

いやいやいや、それはありえないだろう、神様なんているわけがないし、もしいたとしてめそめそと泣いているなんて、

…情けなさ過ぎる。

「…っ、俺は神界族と魔界族のハーフ。世界の管理者。いわゆる神様と呼ばれる存在だ。」

…え、本当に？

ただ単に頭がアレな痛い奴じゃないのか？

「ぜってえ信じてないな！俺は本当に神様なんだぞ！」

なんか、うざい。

でも俺は　なんだぞって自慢する人ほど弱かったりするんだよな。



「じゃあじゃあ、一面花畑にしてみせてよね！」

…なんで花畑？

なんで神様の証明に花畑？

自称神様もうろたえてるよ。そりゃそうだよ。

いきなり花畑作れって言われてはいわかりましたって作るわけない  
だろ。

つか、冷や汗かいてるし、本当に出来るのか？

「え…、花畑？あー、うん、よし、やってやる。ちょっと待ってる  
…。」

数分後  
…

「出来ませんでした！すみません！」

「やっぱりか！」

やっぱり出来なかったみたいだ。最初から嫌な予感したんだが。

ただうちらは時間を浪費しただけのようだ。

「あれ、ゆーちゃんが怒鳴るなんて珍しいんじゃない?」

ん? ああ、本当だ。

珍しいどころか、初めてじゃないか?

こいつ、人を怒らせる才能を持つてんじゃないか?

そんな才能これっぽっちも欲しくないが。

「智香、ちょっとこいつ押さえといてくれ。」

でもやっぱ、一回シバいてやらないとな。

「了解だよー!」

「本当にすいませんでした…(泣)」

「泣くな」

全く、鬱陶しい奴だ。なんだこのへたれ野郎。

結局神だって証明出来てねえじゃねえか。

「で、でも俺は神様なんだ！…えっと、じゃあ証明するために異世界送ってやんよ！」

…本当に何なんだこいつ。立ち直り早いし。

ってか異世界？

「智香、どうする？」

うちは全くこの世界に執着してないし、何処に行っても同じだろうし。

でも智香は違う。

智香は友人がたくさんいるし、今の環境も気に入ってるだろうと思っ  
って声をかけたが…

「じゃー送ってよ、証明になるからね！」

…あれ？

なんかあつさりすぎないか？

そう言われたへたれ（もうへたれでいいよな）は目をぱあああつ、と輝かせる。

そして目を閉じて腕を振ったと思うと、

視界が暗転。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「ん…、あれ…？」

気がつくとうちはベットで寝ていた。起きてまわりを見回す。

ただただ白いシンプルなベット、その近くには漫画などの本が入った本棚。

壁紙は黒、天井も黒、床は市松柄のカーペット。

白や黒で統一された、モノクロの部屋。

って、自分の部屋だ。

今のは白昼夢？それならばやけにリアルだったな。

あの自称神様を殴った感触はまだ残っているし、意識もはつきりしていた。

「なんか気になるな…」

どうしようか。そうだ、智香に聞いてみるか。

智香ならもしかしたらさっきのことが夢じゃないか聞いても知らないのだったら別にそれはそれでいいし、知ってるのならさっきのことが夢じゃないとわかる。

うちは少し頭の中を整理してから行こうと思うほど混乱していた。

だから、すぐに自分の異変に気付かなかった。

青 0 話 「誰!？」「…ぐすつ」(後書き)

こっちは前後に分かれてません。あれ、不思議。  
私(迷猫ちーず)は話のまとめ方が下手なんだね！w w

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5250ba/>

---

赤の原作破壊者、青の傍観者もどき

2012年1月14日16時52分発行